第50号 崋山会報
令和5年4月11日
公益財団法人崋山会

崋山と京博

京都国立博物館　主任研究員　福　士　雄　也

優しい旅びと渡辺崋山が京都に来たという記録はないし、たぶんそんな機会はなかっただろう。天保の飢饉に際して、京都で崋山が救い小屋をつくったという流説は、早くに森銑三氏によって否定され、その流説のもととなった「荒歳流民救恤図」の原図は、崋山ではなく横山華山の弟子小澤華嶽によって描かれたことが明らかにされている（原図は京都の山本読書室に伝わる）。

筆者の勤める京都国立博物館は、京都に関連する有形文化財を収集の主たる対象としているので、横山華山の作品はいくらか収蔵しているが、京都との所縁に乏しい崋山の作品は少なく、一般的に認知されているのは「市河米庵像」くらいだろう。米庵像は、周知のとおり下村観山の旧蔵品。観山は、伝大久保一丘筆「真人図」（神戸市立博物館蔵）も所蔵していたから、西洋画法を取り入れたこの種の肖像（的）作品に関心を寄せていたのかもしれない。米庵像はその後国有品となり、管理換により当館の所蔵となった。

しかし、ほとんど知られていないが、当館はこれ以外に二件の崋山作品を所蔵している。そのひとつは、『錦心図譜』収録の「水仙図」（二四七番）。熊谷の肥料商坂田清兵衛、船成金として知られる実業家山下亀三郎らの所蔵を経て当館の所蔵となった。米庵像とは対照的な、墨画淡彩の略筆画である。

もうひとつは、「牡丹図」。米庵像とも「水仙図」ともまた異なり、南蘋風を思わせる濃彩の花卉図である。各幅とも「臣登」と署名し、「邉静」「子安」白文連印を捺す。こちらは、東洋紡社長などを務めた谷口豊三郎からの寄贈品。豊三郎が創設した谷口工業奨励会（のちの谷口財団）は、国際交流美術史研究会によるシンポジウムおよび報告書の刊行など学術研究への支援でも知られる。付属する資料から、関西紡績業界の重鎮谷口房蔵（豊三郎の父）が所蔵していた大正三年（一九一四）には、陸軍特別大演習統監のため大阪に滞在していた大正天皇の天覧に供されたことがわかる。当時の大阪府知事大久保利武（利通三男）から発せられた依頼文書によれば、作品の取り扱いについては山中吉郎兵衛（山中商会創設者）および戸田弥七（四代目、大阪美術倶楽部社長）の両名に委嘱したらしい。この種の美術品の天覧というと、明治二十八年（一八九五）の広島大本営におけるそれが想起されるが、特別大演習においては恒例イベントとなっていたようで、政治色を帯びた美術関連行事としてなかなかに興味深いものがある。

この「牡丹図」を含む谷口豊三郎寄贈の近世絵画は、平成二年（一九九〇）の受贈後、どういうわけか未紹介のままとなっていたものが少なくない。その中には、崋山や椿山と親しく交遊した岡本秋暉の大幅も含まれている。崋山と京博とは、作品を通じて確かに繋がっていると言えるのかもしれない。

渡辺崋山筆「牡丹図」京都国立博物館蔵

『全楽堂記伝』（九）

―崋山伝記の根底テキスト―

研究会員　別所興一

崋山没後の田原藩

『全楽堂記伝』は、自死を決意した崋山が残した五篇の遺書を記録している。長男・立宛をのぞけば、日付は自死前日の天保十二年（一八四一）十月十日であり、その概要は次の通りである。

四人の弟のうちただ一人在世していた弟・助右衛門（十四歳年下、江戸詰めの岡崎藩士・中山家に養子）宛の遺書では、自殺の理由を自分の不謹慎な行状のため殿様に苦労をおかけしたことだと告げ、〝不忠不孝〟の名が後世に残ることになり、お前に対しても申し訳ないと詫び、母親のために死に物狂いの救助を依頼している。また、妹茂登が嫁入りした桐生（群馬県）の絹買継商の岩本茂兵衛と、その長男・喜太郎への伝言も依頼している。

水戸藩士・金子健四郎（三河吉田出身の魚商の家の出身ながら、抜群の剣技の持ち主。江戸に出て崋山宅に出入りして画作の指導を受けるとともに、崋山の推薦で水戸藩江戸屋敷の剣術指南に就職した）宛の遺書では、自殺の理由は画弟の福田半香が私の家計を援助するために開いた画会が発端になり、主人（田原藩主・三宅康直）の身に危難が及ぶことだと説き、私の没後の老母や妻子の生活支援を懇請している。健四郎は蛮社の獄の前後に崋山一家と親交を結び、崋山一家の身の回りの世話を引き受け、崋山からその将来を期待されていただけに、崋山との永別の悲痛は耐え難いものだったと思われる。

愛弟子・椿椿山宛の遺書では、自分がご公儀（徳川幕府）の政治を批判する罪を犯しながら不謹慎な行動に及んだために主人の身に危難を招くことになったことを自業自得の結果と反省し、きっと天下の物笑いとなり、悪評も沸き起こってくるでしょうと書いた後に、数年の後に世の中が一変すれば、私の死を悲しんでくれる人もおるでしょうか、と書き添えている。また、後難を避けるため、貴兄からいただいたお手紙はすべて廃棄したとも付記している。

崋山は四面楚歌の孤立した境遇にありながら、自分の西洋事情研究や海防論（西欧列強の科学技術の目ざましい発展とアジア進出の危機）が、遠からず世人に理解されることを確信していたのではなかろうか。事実、幕府は十三年後の安政元年（一八五四）に米・英国との和親条約を結び、開国政策に転換した。

また、崋山の同志の鈴木春山は、天保十三年九月十七日付の吉田藩士・柴田猪助宛の書簡で、アヘン戦争後の中国情勢に触れ、地球の形勢はことごとく崋山の審議の通りに相成り、何とも落涙の至りに候、と崋山の先見性をたたえ、その早すぎる死を悼んでいる。

同じく崋山の同志の村上定平宛の遺書では、短い永別の言葉の後に、世の中がはげしく揺れ動き、自分の

目次

題字「崋山会報」元崋山会理事　故小澤耕一氏
P①崋山と京博　福士雄也
P②全楽堂記伝（九）別所興一
P⑥渡辺崋山とプラグマティズム　大﨑洋
P⑨四州真景の旅⑫　中神昌秀
P⑬崋山会学童書道展
P⑭令和4年度崋山・史学研究会研修視察　三重県松阪市を訪ねて　鈴木利昌一
P⑯公益財団法人崋山会　田原市博物館　からご案内

老母や妻子の救助はできにくくなるので、どうか内々で同情支援くださるよう懇願している。併せて崋山の腹心の部下だった真木定前とその実兄・生田何右衛門、蛮社の獄前後に格別に世話になった前途有為な松岡次郎他の皆々様への返礼も、貴兄から伝えてほしいと要望している。

崋山は自分の没後に苦境に立たされる家族の行く末を案じていた。崋山一家との親交の深さから言えば、真木定前や鈴木春山、椿椿山や金子健四郎の方が頼りになりそうであったが、彼らはいずれも江戸に居住していたから、崋山一家の面倒をじかにみてもらう訳にはいかなかった。当時の村上定平は国元の田原詰めで、藩政の中枢には関与していなかったから、国元の親戚縁者への取次役としては最適と考えたのではなかろうか。

崋山が最も信頼していた部下で長年の同志でもあった真木定前と鈴木春山に宛てた遺書がないのは、不思議に思われる。事態の切迫を感じた崋山は、じっくり丹精こめて二人に遺書を書くゆとりが持てなかったのであろうか。あるいは二人に遺書を届けると、彼らが責任感のあまり性急な行動に出て苦境に立たされるのを心配して、二人に遺書を書くのを思いとどまったようにも思われる。

崋山に後事を託された村上は、崋山自刃の翌年に長崎に留学して西洋流砲術の大家・高島秋帆に師事し、その伝授を受けた。四か月後、田原に帰省して間もなく、師の秋帆が鳥居耀蔵の陰謀で逮捕され、十年近く幽囚の身となった。秋帆に代わる高島流の師範代として村上の名声は、三河・遠江・尾張など近隣諸藩に広まっただけでなく、仙台・水戸・上田・金沢など遠隔の諸藩からも留学生が田原の村上邸に派遣されるようになった。

また、田原藩主と藩士百数十名を教授して高島流の門人とし、嘉永三年（一八五〇）には村上の指導により田原藩の軍制を幕府に先駆けて西洋流に転換した。他方、西洋式帆船・順応丸の建造の指揮官を務め、主に江戸・大坂方面への貨物船として運行し、藩財政復興にも貢献した。安政五年（一八五八）には下級武士出身ながら家老職に栄進し、幕末期の田原藩の梶取役を務め、明治維新の変革の下準備に参画した。

崋山より二十一歳年下の松岡次郎は、二十歳ころ田原藩の松岡家の婿養子となったが、妻は一か月後に病死した。その後、渡辺崋山・佐藤一斎・伊藤鳳山らに師事し、蛮社の獄の際には崋山救援運動の中心として活躍した。崋山没後間もなく、崋山関連資料と聞き取り調査により『全楽堂記伝』という崋山伝記の根底テキストを編集している。三十二歳の時に、故崋山の長女可津を妻に迎えたが、嫁と姑の不和で離婚している。

その翌年には家老職に栄進した。橋本佐内らとも親交を結ぶ開明思想の持ち主で、天保期に小関三英が翻訳した『那波列翁（ナポレオン）伝』を田原藩の費用で出版し、西郷隆盛ら幕末の志士に感銘を与えたが、翌年四十五歳の若さで病没した。

長男の渡辺立宛の遺書は、池ノ原の崋山宅に残されたのではなく、崋山が墓碑銘代わりに大書した「不忠不孝渡辺登」の書と共に村上定平宛の遺書に同封されていた。この遺書の主文は、「餓死るとも二君に仕ふべからず」である。差出人名は通称の「登」と記し、「不忠不孝之父」と肩書している。

主文の文言は、『史記』伯夷伝などにある故事に基づいている。周の武王が殷の紂王を討った時、伯夷叔斉の兄弟は共に臣が君を誅することの非道さを説き諫めたが、容れられなかった。それで二人は周の天下統一後は周の禄を食むことを恥とし、首陽山に隠棲し、最後は餓死したことを示している。儒教的信念に基づき、武士として最も大切な「主君への忠義」の精神を力説した文言である。これをどう解釈するかについては諸説がある。敢えて筆者の見解を示すと、次の通りである。

当時田原藩の藩士の間では、藩主

三宅康直の後継者問題をめぐって分裂・抗争が激化していた。崋山や真木定前・鈴木春山らが主唱し、康直も同意して藩論になっていた三宅友信の長男・但太郎後継説が揺らぎ始めていたのである。天保十一年九月に康直の妾腹の男子・屯が生まれたことから、崋山一派に対抗して屯後継説を唱える国家老・鈴木弥太夫らの勢力が次第に多数派を形成しつつあった。崋山はもはや表立った対抗措置を講ずることはできなかったけれども、藩主三宅家の正統な血筋を守ることを大切に考え、それを我が子に理解させようと訴えた一文と解釈することもできる。

また、この遺書は、単に十歳の長男に宛てた私文書ではなく、崋山が立の後援者と目し、長年の同志でもあった真木定前・村上定平・鈴木春山らに但太郎後継説の正統性を改めて訴えた暗示的な政治文書と解釈することもできると言えよう。

実際、崋山の没後、康直は屯を後継にする気持ちに傾いたため、真木は崋山の遺志を踏みにじった康直を何度も諫言した。その結果、次第に遠ざけられるようになったことから、真木は最後の手段として、上書をしたため切腹した。悲報を聞いた康直は、自分の不明から忠臣を失ったことを深く悔い、但太郎後継の誓約を守ったのである。

なお、この立宛の遺書に添え書きされた「御祖母様御存中ハ何卒御機嫌能孝行ヲ尽べし。其方母不幸之もの、又孝行尽べし」という文言は、老母への相変わらぬ孝行心とともに、これまでどの書簡にも表記されることのなかった妻たか（当時三十四歳）への愛情が、ほのかに感じ取られることを特記しておきたい。

崋山自刃後の田原藩の措置について『全楽堂記伝』は、「自刃せし由、早々君家より公儀へ告られて、十一月五日、検屍官出役ありて検校相すみ、其夜田原城南の城宝寺の塋域に葬りぬ。謚して文忠院華山伯登居士といふ」と記している。

江戸詰め藩士の渡辺家の菩提寺は、江戸小石川の善雄寺だったが、遺骨はそこに移送されず、国元田原の上士である村松家（その末裔には明治十年代に三河の自由民権運動の指導者として活躍した村松愛蔵がいる）の墓地の一角に埋葬された。しかし、罪人という理由で墓石の建立は、明治の新政府が成立するまで許可されなかった。

崋山が自刃して二か月後、藩主三宅康直は宿願の幕府役職・奏者番に就任することができた。これについて戯作者の滝沢馬琴は、「崋山の忠死、其甲斐あり」と評しているが、多くの田原藩士も厄介者の自死で、ほっと一息ついたのではなかろうか。

崋山の自死当時、それを悲しんだのは、親族や少数の同志に限られていたようだ。だからこそ崋山は、数年後に政変があれば、自分の訴えたかった真実が世人にも理解されると期待したのではなかろうか。

崋山の人と学芸の意義

『全楽堂記伝』の最終部には、崋山の人間像を語るため、回想形式のエピソードをいくつか紹介している。

「伯登の性慈仁にて、物を見人に接するに惻怛（ひしひしと痛みを共有し憐れむ）すること多し。己が身は常々慎みて聊の疾も殊更に保摂し、纔に腫物に針するさへ懼れ、人わずかの傷つくを見ても顔色が変じていたむことにてありけれども、義を語るに至りては慨然として奮ひ、人の節義を聞けば涙を流して感称せり。自らも棄生取義（命を棄てても正義を貫く）の事は常に任とせり。常々墨竹の（画）題に善く書する自詩に、鄭老画蘭不画土、有為者必有不為、酔来写竹似蘆葉、不作鴟波無節枝と書たりし。其平生養ふ所を見るべし」

最終部の自作の七言絶句の大意は、次の通りである。

北宋末の文人画家の鄭思肖老は、モンゴル族の元が南下して来た時、南部に隠居し、墨蘭画に巧みだったにも関わらず、蘭の画を描いた際に根と土は元王朝に占領されているとして写さなかった。政治改革の必要はあるが、まだその時期ではない。

酔っぱらって描いた竹は、蘆の葉の様になってしまった。鴎波は宋の王族だったにも関わらず、元朝に仕官して無節操な活動をしているが、私はそのようなことは決してしない。

節義を重んずる崋山の真骨頂を示すと言えよう。

「人を汎愛するうち、親姻朋友には殊に親睦して、其生業を助け、其患難を恤ふる事往々有り。又人の為に謀ること忠実を尽し、人の紛を解せるも多し。親戚友人等火災に罹る時は自ら労を憚らずして救助せり。又人の為に親子は子の遺肖を描きて、其哀を慰しこと多し。常に人を容れ、能其言を聴けども、道ならず義ならぬ事は、いかにしても決して聴かず、従はず。上へも下へも此の如し。況して宦官の事に於てをや」

崋山の人への接し方は、上下尊卑に関わらず無私の博愛精神で臨み、相手と苦楽を共有することを心がけていた。しかし、道義に反したことは、決して受け入れず、従属することはなかった。まして中国王朝に隷従する去勢男子のような官僚は、崋山にとって最も唾棄すべき存在だったのである。

別の観点から見ると、崋山は人間の善意をひたすら信じ、誰であろうと話せば道理は通じるものだと思い込んでいたが、その人間認識の甘さから、手痛いしっぺ返しを蒙ることになった。換言すれば、「徳川の平和（パックス・トクガワーナ）」の利権を守るためには手段を選ばない政治権力の悪魔性に対する認識の欠如が、崋山を予想もしなかった窮地に追い込むことになったのである。

また、原文は省略するが、子供の教育方針について、次のように述べたエピソードを紹介している。

子供の教育では、礼儀作法を厳しくしつけることが大切である。しかし、子供が悪事を働いた場合に、激怒して叱りつけたりせず、辛抱強く温和丁寧に教え諭すように、と注意している。また、様々な場面で子供に質問を投げかけて、親子の対話につとめることにより、多くの事を体得させられると指摘している。

この他にも崋山の包容力のある人柄を示すエピソードがたくさん記載されているが、紙面の都合で割愛する。老骨の筆者に代わって、地元の若い世代が本書の原文にあたって、人間崋山の知られざる精神的遺産を発掘して下さることを切望する。

崋山はもともと煩わしい政務から解き放たれ、好きな画作に専念できることを願っていたが、士大夫（文人官僚）としての責任感を捨てきれず、いつしか海防問題に深入りして、窮地に立たされることになったのである。崋山は政治と画作の両極の間を揺れ動きながらも、郷国田原と世界をリアルに観察し、近代的な感覚と道理にかなった言説や画作を展開しようとした。しかし、そのひたむきな努力自体が、身の破滅につながりかねない事態を招いたのである。そこに、開国前夜の知識人・渡辺崋山の苦悩があったと言えよう。

この徳川知識人の苦悩は、独断を恐れずに言えば、共産党一党支配下の現代中国の開明派知識人の苦悩と通底していると思う。そこでは現政治体制への批判はタブーであり、司法権の独立が否定され、政治の進め方への異議申し立ては、事実上厳禁されているからである。

一昨年末、田原市文化会館で上演された市民劇『海風に吹かれて―渡辺崋山の後半生』は、海外事情研究の拠点として三宅友信の巣鴨屋敷をクローズアップし、崋山の世界に開かれたヒューマンな精神の源流を明らかにした。崋山は西欧近代社会の個性開発・万事議論を重視した内政を評価し、その導入を構想していたが、半面、「権略の政」という領土拡張政策に脅威を感じ、自主防衛のための海軍力の増強を唱えていた。

しかし道徳に東洋と西洋の違いはなく全世界共通するものだから、「権略の政」を排し地球人類の平和的共存の道を選ぶべきだ、と崋山は後世に訴えたかったのではなかろうか。

渡辺崋山とプラグマティズム

研究会員　大崎　洋

一　はじめに

渡辺崋山は生涯儒学の枠から出なかったといわれるが、教育思想の根底にある学問観は華美を尊ばず、「唯実用第一」とした。この崋山の教育思想はアメリカで生まれた哲学「プラグマティズム」の考えに類似している。

プラグマティズムは「実用主義」と訳され、日常生活をよく生きることに関する一つの徹底した思想である。

崋山は「各人の能力を伸ばし、その能力に応じて働くことができ、それぞれが生きがいを実感できるような世界を作ろう」とし、学問の骨格として「実学」を重んじた。

歴史学者の源了圓（一九二〇～二〇二〇）は「実学」を実際の役に立つ功用性（utility）をもつ学問、実用的な（pragmatic）学問、また現実的な、すなわちactualでrealな学問、あるいはまた実践的な（positive）学問、というような様々のニュアンスをもつ内容を含意しているとしている。これは実用主義を意味するプラグマティズムの本質と通ずるものである。

プラグマティズムの人は、何でも経験しようとする人、好奇心の強い人といわれる。

崋山はまさにプラグマティズムの人といえるのではないだろうか。

二　プラグマティズムについて

「プラグマティズム」という言葉は、「行為」「行動」などを意味するギリシャ語のプラグマに由来する。

プラグマティズムの礎を築いたのは一九～二〇世紀にかけて、アメリカのパース（一八三九～一九一四）が創説者であり、ジェイムズ（一八四二～一九一〇）によって普及され、デューイ（一八五九～一九五二）が新解釈を与えた。

そして、三人の思想上の特色は、第一に真理を実践上の有効さで決めること（パース）、真理とは我々を導く仕方で最もよい働きをするものであり、生活のどの部分にも、最もよく適応するものであること（ジェームズ）、知識は実践的行為の一様式であり、知識と実践とを関連づける（デューイ）といえる。

プラグマティズムは、「経験不可能な事柄の真理を考えることができない」という点でイギリス経験論を引き継ぎ、概念や認識をそれがもたらす客観的な結果によって科学的に記述しようとする志向をもつ点、でヨーロッパの観念論的哲学と一線を画する。頭の中の観念よりも実際の行動やそこから出てきた結果（事実）を重んずる考え方である。

日本の思想界では、プラグマティズムへの言及は哲学者の西田幾多郎（一八七〇～一九四五）の『善の研究』で説かれた、「純粋経験」（反省が加わる前の、主観と客観が区別されない直接的な経験）にみられるように、比較的早い時期からあった。

しかし、プラグマティズムを戦後、本格的にもたらしたのは思想家・社会活動家の鶴見俊輔（一九二二～二〇一五）といわれている。

プラグマティズムの目的は、あくまで知識を実践するものであり、その特徴は、反デカルト主義とされる、「唯一の真理」の探究を放棄し、多元的な真理を許容するとともに、他者の協力を大切にするものである。

実用主義の中心にあるのは、その思想がもたらす「帰結」であって、「源」ではないとされる。プラグマティズムは不完全な人間像を肯定し、複数の他者が織りなす共同体の思想でもある。

知識を実践と結びつけるプラグマティズムは、すぐに正解がでるものではない。人間は間違いを犯す存在であるし、世の中に多様な考え方があるので、それを前提に探求を続けていくことが大事とされる。

崋山は、天保二年（一八三一）三九歳の時、江戸表の田原藩上屋敷に文武稽古所が開設された折、教師心得として「師範方被仰出案」を起草し、藩子弟の人材養成に当たる者の心構えを説いた。その中に

「才能の儀は有用をむねと致可申、若又異才異能の者有之候而実天稟にして抜群の者は、大倫の外小廉曲瑾を以て其才能を塞がざる様寛様可致事。」と示している。

人間の才能は、日常生活の場で有効に活用することが大切であること、また、抜群の特異な才能の持主に出会ったら、その人物が人倫の大道を踏み外さない限りは、わずかな欠点によってその発育の芽をつみとらないよう忠告している。それぞれの生徒の多様な個性を尊重し、徒らに型にはめこまないことを強調し忠告したが、これもプラグマティズムに通じるものである。

三　崋山とプラグマティズム

崋山は藩財政が苦況に立たされても、徳治主義の理想を高く掲げ、「養才教化」を藩政の根幹においた。「養才政策」実施の前提として、従来の家禄制度に変わる職務給制を原則とする格高制を創案し、人材登用の道を開いた。

藩校成章館の再建を図り、ここに儒者伊藤鳳山を招聘するとともに、教育方針は、実理を拝してもっぱら実用の学、実行の活学を奨励した。

崋山の学問に対する考え方を示すものとして、天保四年（一八三三）に江戸詰家老だった崋山が国元に宛てた書簡で、藩校成章館の教育方針を次のように指示した。

藩校教育の趣意は、何よりも先ず孔孟の教えを学んで、士大夫（民・百姓の上に立って彼らを指導する立場の人達）としての人格識見を高めさせることにある、と力説し、

「学問華美を尊バず、唯実用第一致し、己ガ識見を立、路を古之聖賢に踏之事を、今日之俗に随ひ言語・容兒・動静・云為ニ至迄同様ニ致候。」

としている。

学問においては華美を尊ばず、実用第一に考え、自分の識見を打ち立て進むべき道は古今の聖賢を踏まえ、今日の通俗にも対応して、言語・容貌・動静・言行に到るまで同様の心構えで処したいと述べる。

さらに、前述の「師範方被仰出案」には、

「実行は第一之事に候得共、学問不精候而は施行も亦広からずして、御用立不申候間此御趣旨を差含、序を失ひ本を忘れざる様に教諭可有之事」

とある。

実行を第一とし、実生活と遊離した机上の学問に甘んずることを戒め、学問を実行することの大切さを訴えながらも、学問に精通して人間の幅を広げ、道理の根本を見失わせないようにと示している。

崋山の最初の儒学の師鷹見星皐は徂徠学の影響を強く受けていた。第二の師である佐藤一斎（一七七二～一八五九）は朱子学者であったが、陽明学にも明るかった。それらの教えを受けた崋山の儒学思想には徂徠学派や陽明学の流れが強かった。江戸時代を通じて、儒学のうちにも中期からは実証主義的、現実主義的傾向がしだいに強まってきているが「崋山の学問にも済世民福のための実学的傾向が強い」と評論家の蔵原惟人（一九〇二～一九九一）は『渡辺崋山』で著している。そして三番目の師は松崎慊堂（一七七一～一八四四）である。松崎慊堂は、はじめ朱子学を学んだが、その空理性を嫌い、考証学を構築した。蛮社の獄で逮捕された、崋山救出のため、高齢をおして、まさに命をかけて赦免の陳情上書「崋山赦免建白書」を書き、老中水野忠邦に提出するなど、崋山救出の中心的役割を果たした。

デューイ哲学が生活の哲学であり、「経験の哲学」であるといわれるのは、人間生活の全ての営みを「経験」とみるからである。経験とは人間の身体と心が一体となって、動くはたらく関係であり、ある一つの状況における知識と行為の統一である。知識と行為の連続性がそこにある、とする。

崋山は、学問はすべて現実の政治や生活の改善に役立つだけでなく徳治主義の理想に基づく学問、すなわち「実学」でなければならないという信念をもち、その立場から儒学だけでなく蘭学も学ぶようになった。その思想は、「経験の哲学」といわれるデューイにつながっている。

四　崋山と福沢諭吉

福沢諭吉（一八三五～一九〇一）は自ら「西洋文明の伝道師」を任じていた。

一方、蘭学者でもない崋山は、多くの人から「蘭学にて大施主」と噂されたのは、熱心に西洋を紹介し、西洋への関心を呼び起こすといった啓蒙活動によるものである。崋山のこうした活動は、西洋への警戒心を否定するものであり、やがて鳥居耀蔵の憎むところであった。

開国後の福沢の行った啓蒙は、日本人の西洋に対する誤解を解いて「唯西洋の事実を明にして日本国民の変通を促す」ことであった。一方、崋山は、福沢のいう「文明開化の門」に到る前に、西

洋と日本人の間を隔てている鎖国という厚い壁が立ちはだかっていた。そのため崋山は、日本人が鎖国化の現状に満足するのではなく、西洋の政治・社会制度が、清国や日本のそれよりも優れていることを知らせて、西洋に対する関心を呼び起こそうとしたのである

鶴見俊輔は日本における最初のプラグマティストを福沢諭吉としている。

福沢の著した『唐人往来』や『西洋事情』等の作品の中には、「行為」という明確な発想点は見出されないが、過程の論理、問題解決の論理、価値判断における多価値等から、福沢の思想は、プラグマティズムの礎を築いたジェームズやデューイに類似した思想であるとしている。

しかし、福沢の『唐人往来』や『西洋事情』とはスケールは違うが、崋山は福沢の三〇年前に西洋を紹介する『鴃舌或問』『鴃舌小記』『西洋事情書』などを著して密かに啓蒙を試みていた。

崋山が西洋の学術研究や教育を具体的に論じた最初の著書は『鴃舌或問』である。この書は、天保九年（一八三八）三月に江戸参府したオランダ商館長ニーマンと対談した際の質疑応答の記録を主な内容としている。

「欧邏巴人は表面は謙遜礼譲コレアリ候得共、内裏ハ誇大ニ御座候。本体功利を基ト仕候故、礼譲モ礼譲トハ申ガタク、傲慢モ傲慢ニ相立申サズ、唐土ノ人ノ申ゴトク、喜バ人也、怒レバ獣也、ト申通ニコレアル可シ。去リナガラ、四方を審ニ致候者故、了簡ハ小々ナラズト存ジ奉リ候。」

西洋人は、表面上は謙遜礼譲のポーズをとっているけれども、「功利」をもって行為の基準にしているので、必ずしもそのまま信用するわけにはいかない。その応待には注意する必要がある。しかし、世界の事情に通じた連中のことだから、了簡は決して狭くはないと述べている。

歴史学者の佐藤昌介（一九一八～一九九七）は、崋山の思想は福沢の思想の先駆といえるものであり、崋山の思想を継承発展させたものが、福沢の文明開化の思想であるとしている。

福沢に比べ、崋山の活躍した期間は短いので著作も少ないが、福沢より三十年も早く西洋に対しての啓蒙活動に取り組んだ崋山こそ、近代幕開けを開いた日本で最初のプラグマティストといえるのではないだろうか

五　まとめ

「内省」よりも、むしろ「行動」というポジティブな姿勢を持ち続けたのは崋山とデューイの共通するところである

デューイの教育思想は、民主主義と深く関わっている。デューイにとって、民主主義とは、人々の豊かなコミュニケーションを基盤にして、社会的な問題の解決をめざす協同的活動が組織され、参加・貢献するという生活の仕方だとしている。

一方、封建時代の幕府の文教政策は、すべての学問・思想を幕藩領主の管理統制下に置いていた。その中で、尚歯会のメンバーは、市民としての姿勢を貫いて学問をすすめ、政策批判等を展開した。その中心者として、社会を良くするために命をかけて奮闘した崋山。

今、混迷を深めるグローバルな社会にあって、あらゆる面で分断がすすんでいる。プラグマティズムは不完全な人間像を肯定し、複数の他者が織りなす多様な共同体の思想である。その思想が、分断から再構築につながる鍵になるのではないだろうか。

今こそ、幕府を恐れず、国の将来を思い描いた、偉大なプラグマティスト崋山の功績を学び、実践していくことが現代に生きる我々の使命である。

参考文献

魚津郁夫『プラグマティズムと現代』放送大学教育振興会

小川仁志『アメリカを動かす思想 - プラグマティズム入門』講談社現代新書

小澤耕一・芳賀登監修『渡辺崋山集　第一巻～第七巻』日本図書センター

加藤文三『渡辺崋山』大月書店

佐藤昌介『洋学史研究序説』岩波書店

田浦武雄『デューイとその時代』玉川大学出版会

谷口忠顕『デューイの知識論』九州大学出版会

鶴見俊輔『アメリカ哲学』こぶし文庫

日比野秀男『渡辺崋山―秘められた海防思想』ぺりかん社

別所興一『渡辺崋山―郷国と世界へのまなざし』あるむ

芳賀登『蛮社の獄』秀英出版

『四州真景の旅』⑫
游総図着色

研究会員　中神昌秀

一　序

四州真景図(重要文化財、個人蔵)は、文政八年(一八二五)夏、崋山三三の歳、利根川下流域を旅行した時のスケッチ画入り紀行文です。この真景図は、晩年に着色され現在の形になりました。前回は、着色の背景ともなる蟄居中の作画について書きました。今回は、この作品が、田原蟄居中の天保一一年(一八四〇)に着色された意義と、名品の誕生を訪ねる旅をしてみたいと思います。

二『四州真景図』と『游総図』

田原蟄居中の崋山日記である『守困日歴』の中に、「游総図着色。」という記載が出てきます。この『游総図』と『四州真景図』は同一のものであることを説明します。

崋山は、旅の三日目、七月二日に臨済宗妙心寺派海雲山長勝寺(茨城県潮来市)を訪問します。ここを描いたものが、「海雲山在潮来北里」という真景図です。その左半分に文章があります。常葉美術館名誉館長である菅沼貞三氏は、これを「後日の記入のみか、崋山の晩筆と推定される。」と書いています。後日の加筆かはともかく、

四州真景図「海雲山在潮来北里」　紙本墨画淡彩　13・5×39・5cm

三行目に「相贈予游総可徴者集成」とあり、ここに游総と言う言葉が出てくることから、『守困日歴』天保一一年七月二三日の中の游総図と『四州真景図』が同一である根拠となります。

三『守困日歴』游総図着色に関する記載

崋山は文政八年夏に、この真景図を描きます。しかし、そこでこの作品が完成したわけではありません。

『守困日歴』の「游総図着色。」という記載を含む二三日の日記は、次のように書かれています。**「同　二十三日　一、以来月九日、以先考十七年忌辰奠銀二銖。致書江都平山、和田、雪吹、嘱之。一、萱生源左衛門、農夫善四郎来。一、游総図着色。」**口語訳は次のとおりです。「七月二三日　一、来月九日は亡父の一七回忌に当たるので、法要に銀二銖を包むこととする。手紙を出し、江戸の平山、和田、雪吹に依頼した。一、萱生源左衛門、農夫渥美善四郎(極楽新田元締)が来訪。一、游総図を着色した。」

『守困日歴』の中に、この日以外には、游総図に言及した記載はありません。『守困日歴』は、天保一一年七月一日から始まり、同年一二月二八日で終わりますが、八月は一日と二日、一一月は無く、一二月は二八日しか記載がありません。もしかすると、日記には書かれていない着色を行った日が有った可能性もあります。

四『游総図』着色時における絵画技術の完成

崋山晩年の天保一一年に『游総図着色』という作業がどの程度行われたのかは明確ではありませんが、着色によって現在の形となり、名品に仕上がったことは疑う余地はありません。

ところで、着色が行われた天保一一年という年は非常に重要な意味を持っています。それは、崋山の絵画技術が完成期に入り、以前にも増してレベルの高い作品を生み出した時代と重なっていたからです。これは、崋山会報四八号で説明したように、天保一一年、一二年に多くの重要文化財や重要美術品に指定された作品が描かれたことによっても証明されています。また菅沼貞三氏も、蟄居中の作品について、「至上境に達したものといえよう」と高く評価しています。

そして現在、名品四州真景図を見ることができるのは、崋山の画技が頂点を形成した、この年に偶然にも着色が行われたからです。もし、もっと以前に、例えば四州真景の旅をした文政八年から数年後に着色されていたならば、現在の様な完成度の高い作品にはなっていなかったでしょう。

五　蟄居中の作画への阻害要因の消滅

蟄居中の天保一一年、一二年には、多くの重要文化財や重要美術品に指定された作品が描かれましたが、これは崋山が絵画だけに専念できるようになったということも大きく影響しています。

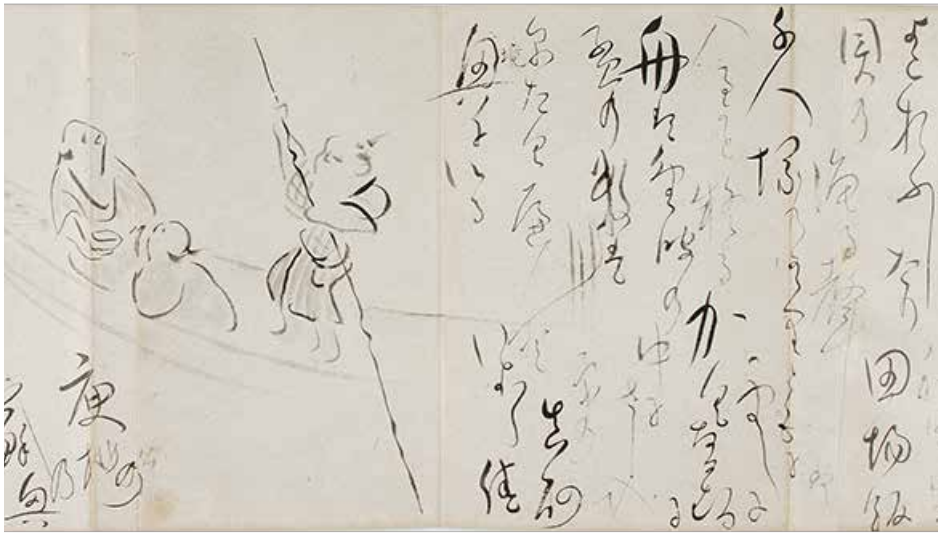
蟄居前は、藩の重役として、藩政に時間を費やしていました。また、藩政とも関連しますが、蘭学の研究にもかなりの時間を使っていました。そして崋山の心中では、藩政、蘭学と絵画の三つについて、どこにどれだけの比重を置くべきか、いつも悩んでいました。

しかし、幸か不幸か、蟄居により、藩政からは身を引き(藩の重役から相談を受ける程度の事はあった)、蘭学の研究もできなくなってしまったのです。これにより、望んではいたものの叶わなかった、絵画だけに専念できる状況ができてしまいました。客観的にはそのような状況に追い込まれたのですが、崋山の気持ちの上では、積極的に時間と情熱を絵画のみに注ぐというものであったと思います。

六『游総図』画稿の巻子装への改装

『游総図』は、四州真景の旅の中で描いたスケッチとも言うべきものでした。崋山としてはこれは画稿のつもりで描いたもので、いずれ清書の制作をと考えていたのではないでしょうか。四州真景の旅から戻った崋山は、まず『刀祢河游記』を制作します。これは、下総国海上郡荒野村(現銚子市)の富豪大里庄治郎（一七八三～一八四五）に贈られたものです。『刀祢河游記』は大里が、七月一五日夜、利根川に舟を浮かべて崋山一行を歓待したという話をテーマとしたものです。崋山は、お礼として、その夜のことを記した絵入りの巻物を、贈ったとされています。

『刀祢河游記』には画稿と大里本の二つがあります。『刀祢河游記』は、大里家で代々大切に保管されていましたが、昭和二〇年（一九四五）の銚子空襲で焼失してしまいました。もう一つ



刀　祢　河　游　記

コロタイプ版があり、原本の所在は不明ですが、東京都庭園美術館名誉館長の鈴木進氏は、画稿をコロタイプ印刷したものであるとされています。

『游総図』も当然、清書の制作を予定していたはずですが、それに取り掛かることはありませんでした。現存の四州真景図は、田原蟄居中、画稿であったものに、着色がされ、清書の完成に向かって行動が起こされた状態でした。そして、本来はまだ完成とは言えない状態であったにもかかわらず後日の巻子装への改装により偶然、完成に見える形となったのではないでしょうか。

鈴木進監修『覆刻渡辺崋山真景・写生帖集成』
一輯　平凡社教育産業センター

『四州真景図』は崋山自刃後、冊子装であったものが、明治中期に巻子装、いわゆる巻物の形に改装されたとされています。元は冊子装であった『四州真景図』は清書途上の画稿であったという事実は、『刀祢河游記』のコロタイプ版が冊子装の画稿であったということからも裏付けられるのではないでしょうか。

なお、『守困日歴』の「游総図着色」と同日に亡父の一七回忌の話が出てきますので、崋山の心中では着色は供養の意味もあったのかもしれません。

七『游総図』着色に関する菅沼氏見解

菅沼貞三氏は、着色について『守困日歴』の天保一一年七月二三日の条に「游総図着色」という記事を見出して、「本図ははじめ旅の途中において墨筆のみで図写し来り、後になって遠い昔の記憶を辿って着色されたものと想定され、その間の消息がやや氷解するところがあった」と述べています。但し「滑川沿岸の風致は、淡薄の草の汁を彩した丘上に」とも書いています。

そして、「着彩については、事物の色感とややかけ離れた憾みがないとはいわれない。例えば海岸図に見る波頭の胡粉の点描や岩石の陰影における色調の過重な点など、実写描写にしてはやや見劣りする皮相な感をとどめているのである。」としています。

菅沼氏の主張する着彩についての見解は銚子

四州真景図「川口　鵜ノ糞石」　紙本墨画淡彩　13・5×82・5㎝

の海岸を描いた真景図に限定されたものではないでしょうか。この点については、確かに指摘の通りであると思います。しかし、釜原や潮来花柳をはじめとした四州真景図の大部分の着色についてはその批判は当てはまらないと考えます。

四州真景の旅で出会った感動的情景は、まず墨筆のクロッキーで描かれ、一部は利根川の碇泊中の船上や、夜の旅籠で最小限の着色がされたのでした。時は流れ天保一一年に至って、高度に洗練された画技を駆使した着色が施されて、釜原の草原、十里河岸の利根川、潮来の少し寂びれた花柳街は、新たな生命が宿り、旅先での感動が目の前にあるように、生き生きと再現され、『游総図』は蘇ったのです。

菅沼氏は四州真景図の解説の最後で「崋山のごとく自然の写実性を重んずるものにとって、この「游総図」こそ、山水画の代表作に推すことは、あながち失当ではなかろうと思われる。」と締めくくっています。

八　『游総図』着色に関する私見

『游総図』着色について、蟄居中の天保一一年七月二三日は間違いないとして、着色に費やしたのは、その日だけだったのでしょうか。それとも日記や書簡に記録はないものの、もう何日か着色作業をしたのでしょうか。

どの程度、着色したかにより、時間、日数も当然変わってきます。崋山の頭の中には、着色したい箇所のイメージはできていたのではないでしょうか。従って、作業は、捗ったのではないかと推測できます。

さて、『四州真景図』は四巻から成る巻物ですが、そのうち四之巻はすべて銚子名所を描いたもので、三之巻の最後二図も銚子に関するものです。銚子では富豪の大里邸に何日か滞在していました。大里は俳人として、句集の出版で江戸の版元とも懇意であり、商売でも江戸を何度も往復しているので、画材も入手できたでしょう。場合によっては、崋山が画材一式を事前に大里邸に送っておくこともできたでしょう。また、崋山は、日中に写生した銚子名所を大里邸に戻ってから着色した可能性は十分考えられます。時間、画材等の面からも、この部分は、完成レベルまで仕上げられたと言っても過言ではないと思います。そのため、銚子名所の各図は、崋山の師谷文晁（一七六三～一八四一）の『公余探勝図巻』（重要文化財　二巻　紙本着色　各縦二三・七×横三一・九cm　三九図　東京国立博物館蔵）に雰囲気が似ているように思います。もし、江戸に戻ってすぐ、他の真景図も清書をしていたならば、四州真景図全体が『公余探勝図巻』風になっていたかもしれません。

仮に、銚子名所の写生を大里邸で着色したとしても、それ以外の真景図については、着色はいつどの程度されたのでしょうか。菅沼氏は「墨筆のみで図写し」と主張していますが、はたしてそうでしょうか。そもそも絵具は四州真景の旅に持って行ったのでしょうか。結論から言うと、何色かの少量の絵具と画材は携帯していたと推定されます。その手掛かりとなるのが、天保二年（一八三一）の『游相日記』です。この点については、次号で、もう少し詳しく書く予定です。

着色に関し、どこをどのくらい着色したのかは、大変興味があるところですが、残念ながら不明であるのが事実です。着色に関する問題が解明されることを俟ちたいと思います。

九　終わりに

一部繰り返しになりますが、四州真景図が晩年に着色され現在の形になったことは、周知の事実です。しかし、「釜原」をはじめ数々の真景図の着色が、晩年の画技のレベルが高い時期になされたおかげで、現在のような名品となったということを主張する人はあまりいません。今回はそんな話を書いてみました。

※連載中に、一度紹介した文献は紹介を省略します。

※掲載の『四州真景図』は、原本から撮影した画像を使用しています。許可下さった所蔵者様に、深く感謝申し上げます。

「第11回 崋山会学童書道展」入賞作品のお知らせ

公益財団法人崋山会では、郷土の偉人渡辺崋山の遺徳を学ぶ機会として、学童書道展を開催しております。田原市内の習字教室に通う小学生、中学生を対象に作品の募集をしたところ、小学生85点・中学生21点の応募がありました。応募総数106点の中から、優秀作品29点を選定し、そのうち特選作品5点をご紹介させていただきます。

ご応募いただきました皆さんやご協力をいただきました習字教室の先生方に厚くお礼申し上げます。

公益財団法人崋山会

低学年の部

入選

ほうぞうじりお　あきのゆりえ
住友　華　福井　柚花
渡會　彩太　小久保百合華
河合莉央奈

奨励賞

金澤　心春

高学年の部

入選

永井　逸晴　野嶋　由愛
田中のどか　青木　莉玖
川崎　夏花　阿部　玲子
河合　謡　彦阪梨衣沙
永井　新大

奨励賞

鈴木　那実　野村　隆心

中学生の部

入選

大下　侑記　尾澤　怜奈
田中　美羽

奨励賞

小林　一琥　小久保茉莉

令和4年度崋山・史学研究会研修視察
三重県松阪市を訪ねて

令和5年度崋山・史学研究会研修視察は、十一月二十六、二十七日、土日曜日にかけての一泊二日で行われました。当日、午前九時、田原市博物館の駐車場に集合した会員は、石川洋一・大﨑洋・加藤克己・柴田雅芳・鈴木利昌の五名、乗合せで出発し、伊良湖へ向かいます。目的地は三重県松阪市で、公共交通機関として鳥羽市まで伊勢湾フェリーを使用し、今回も、昨年・一昨年に引き続き、三重県内の移動については、レンタカーを利用することにします。伊勢湾フェリー鳥羽丸で鳥羽に到着すると、予約してあるレンタカー店へ向かって徒歩で移動します。もう昼近くになっていましたので、途中にあった網元いわし亭で食事をとります。駅前で予約しておいた車を受け取り、松阪市へ向かいます。

まず、最初の目的地は、渡辺崋山の二男で、渡辺家を継いだ小華と交流のあった松浦武四郎（一八一八～一八八八）記念館ですが、記念館から約七百メートルで、松浦武四郎誕生地として市指定史跡がありましたので、先にそちらから見学します。誕生地と記念館は、共通券です。誕生地は松浦武四郎の実家にあたる場所で、前の道は「伊勢街道」で、南に行けば伊勢神宮、古くから「おかげ参り」の旅人が通行していました。武四郎が十代の頃は、「文政のおかげ参り」で、年間四、五百万人が歩いたようです。武四郎生誕二百年の平成三十年に、明治維新直前に作られた家相図に基づき、当時の主屋・離れが保存修理と土蔵・納屋の補強工事が行われています。

松浦武四郎は、十七歳から全国を巡り、亡くなるまで沖縄以外の日本各地二万キロを歩き、幕末にはロシアとの緊張関係にあった蝦夷地（現在の北海道）を六回にわたり探査し、詳細な調査記録と地図を残し、明治維新には政府で開拓使の判官を務め、「北海道」の名前につながる道名や国名・郡名などの選定に携わったことから「北海道の名付け親」と呼ばれています。記念館は、平成六年（一九九四）に開館し、二〇〇八年には、松浦武四郎関係資料一五〇五点が重要文化財に指定され、それ以前にも三重県指定有形文化財となっている資料が二二三点あります。令和四年四月に展示室を含めて、全館リニューアルしていますので、その見学をするのも目的の一つです。企画展示室では二ヶ月に一度、展示替えを行い、視察時には「武四郎の詩と歌」として重要文化財二十四点を含む展示がされていました。武四郎は兄の子の教育について、漢詩と和歌は、日本が始まって以来の伝統があり、「世を経（おさ）め、民を済（すく）う」の種となるものであるので必ず学ぶようにと記しているとのことです。田原市博物館でも平成十九年の企画展「渡辺小華展」で当時はまだ三重県指定有形文化財だった武四郎関係資料の一部を借用出品させていただきました。現在館長となられた学芸員の山本命さんに館内をご案内いただきました。テーマ展示室内の「多彩な交流」コーナーの「趣味に関わる交流・画家」のパネルの中には渡辺小華の名前もあり、武四郎の北海道紀行本の挿絵を描いています。見学後、松阪市内中心部へ戻り、「旅館満喜」にチェックインしました。宿での夕食は松阪牛のすき焼きで、旅の疲れも吹き飛びました。

第二日目は、豪商のまち松阪から江戸日本橋へ進出した旧小津清左衛門家から見学します。県指定文化財建造物の旧小津家住宅と敷地は松

松浦武四郎記念館

阪市指定史跡です。市内で共通券で入館できる3館の一つです。3館の運営は、いずれもNPO法人松阪歴史文化舎に委託されています。受付で入館手続きを終えると、ボランティアガイドの方からの説明を受けられ、玄関から土間へ入ると、全国でも珍しい青銅製の万両箱が出迎えてくれます。江戸一番の紙問屋として栄え、現在でも小津商店を中心にグループ企業として活動しています。企画展として内蔵一階で「松坂ゆかりの豪商　三井家の歴史」、二階で「小津清左衛門家資料・小津家に伝わる商業資料」を開催中でした。

旧小津家住宅で説明を受ける

次に、国指定重要文化財建造物旧長谷川家住宅と県指定史跡及び名勝の長谷川氏旧宅のある旧長谷川治郎兵衛家へ移動します。縞模様のブランド品「松阪縞」の生産で財を成した家です。江戸で木綿問屋を五店経営して、主人は、紀州藩役所の仕事をしながら、茶道や和歌・俳句などを嗜みました。大正座敷広間は贅を尽くしたもので、茶道の千宗室や国学者の本居宣長のスポンサーとして支援も行っていたそうです。十九世紀末期に築造された池を中心とした日本庭園と座敷・茶室があり、名勝にもなっています。当日は庭園を眺められる座敷で呈茶もいただくことができました。企画展「長谷川家の奉公人たち」を開催中で、ここでもボランティアガイドの説明をしてもらえます。道を挟んだ向かい側に駐車場があり、その隣には、松阪城内に移築された本居宣長旧宅跡があります。

共通券の三番目、原田二郎旧宅へ入館する前に車を土日曜日のみ駐車可能な市役所に置いておきます。松阪城を見学後に駐車場まで戻れます。手前に国登録有形文化財の割烹旅館八千代がありましたが、道から看板だけを眺めて、殿町の市指定文化財建造物の原田二郎旧宅に入ります。同心の家として武家屋敷の風情を残し、実業家として引退後に福祉医療や教育振興事業を行う財団法人を設立した人物です。明治時代に増築した二階からは城の外堀跡を見下ろすこともできます。

松阪城跡に南東の搦手口から入り、三ノ丸跡の国指定重要文化財建造物御城番屋敷（旧松阪御城番長屋）です。かつて城の警護にあたった武士の家族が住んでいた組屋敷で、現在もその子孫が暮らしています。一戸が公開されており、四部屋と玄関・土間、水回りに小さな庭のシンプルな造りです。また、屋敷以外に土蔵が残り、三重県指定文化財になっています。そのまま進むと国指定史跡松坂城跡の石垣が現れてきます。裏門跡を経て、国指定史跡の鈴屋こと本居宣長旧宅へ寄ります。一階は上がれますが、本来二階が鈴屋と呼ばれる宣長の書斎ですが、当日は残念ながら上がれませんでした。すぐに本居宣長（一七三〇～一八〇一）記念館で、収蔵品点数は宣長自筆の稿本や遺愛品など一万六千点に及びます。崋山の旧蔵書にも宣長の著作本が含まれています。本丸跡を迂回し、城内の最後に見学するのは、登録有形文化財になっている市立歴史民俗資料館です。この館は、明治末年に建てられた元飯南郡図書館で、一階は、蒲生氏郷と松坂城、松阪木綿の展示、二階は映画監督の小津安二郎松阪記念館になっています。安二郎は九歳からの十代を父の故郷、松阪で過ごしています。市内で昼食を取り、鳥羽へ向かい、レンタカー返却後、来た時と同様、伊勢湾フェリーに乗って帰路につきました。

渡辺崋山の息子、小華と交流のあった人物の記念館を訪ねての視察でしたが、歴史の重みを感じさせる旅となりました。

研究会員　鈴木利昌

公益財団法人崋山会
田原市博物館 からご案内

田原市博物館展覧会のご案内

十月七日(土)～十二月三日(日)

特別展

田原市制二十周年記念
ドナルド・キーンと渡辺崋山

日本学者ドナルド・キーン（一九二二～二〇一九）の著作には、渡辺崋山を取り上げたものもあり、さらに田原市博物館の名誉館長も務め、田原市と縁の深い人物でした。

本展では、その足跡と著作の数々にこめた思いを、多彩な資料によって辿ります。

【特別展イベント】

詳細はホームページをご覧ください。

・ギャラリートーク など

重要文化財　椿椿山筆　渡辺崋山像
嘉永6（1853）年

四月十五日(土)～六月四日(日)

ふるさとの歴史　芭蕉と磯丸

海と山の織り成す渥美半島の風土からは、多くの言葉、歌、文章などが生みだされました。松尾芭蕉、糟谷磯丸など渥美半島にゆかりを持つ人々の作品を紹介します。

六月十日(土)～七月三十日(日)

館蔵　太田洋愛展

田原市は日本一の花の生産地です。その田原に生まれた太田洋愛は、植物を精確に描き出すボタニカルアートの第一人者となるとともに、その普及発展に努めた人物です。牧野富太郎とも関わりを持っています。洋愛の描き出す草花をお楽しみください。

太田洋愛「ホンシャクナゲ」

八月五日(土)～十月一日(日)

生誕百五十年　宮川春汀

宮川春汀は田原市福江町出身の挿絵画家です。子供の遊びや生活の様子を描いた作品や美人画などの錦絵も一時期ですが描きました。生誕百五十年にあたり春汀の芸術世界をご覧ください。

四月十五日(土)～六月四日(日)
六月十日(土)～七月三十日(日)
八月五日(土)～十月一日(日)
（企画展示室2）

田原市博物館三十年のあゆみ

田原市博物館は今年で開館三十周年を迎えます。この三十年の間に展覧会をいくつも開催してきました。この節目の年に、これまでの展覧会や収集した文化財を振り返ります。

渡辺崋山の生涯と作品

常設展示室では、渡辺崋山の生涯を常時紹介しています。

また、特別展示室では、崋山やその師友、弟子等の作品を随時入替えながら展示しています。

観覧料

特別展開催時
ドナルド・キーンと渡辺崋山

一般　七〇〇円（五六〇円）
小中生　三五〇円（二八〇円）

その他

一般　三一〇円（二四〇円）
小中生　一五〇円（一二〇円）

（　）内は二十人以上の団体料金

東三河在住の小中学生は、ほの国こどもパスポート提示で無料。

休館日

毎週月曜日（祝日の場合はその翌平日）、展示替日

（公財）崋山会から

講座「渡辺崋山を知るために」

毎月十一日午前九時から

崋山・史学研究会会員募集中

毎月第四土曜日研究会
視察研修（年一回）に参加できます。

渡辺崋山史跡巡りガイド養成講座

毎月一回程度
申込場所　崋山会館事務室

崋山会報　第五十号
令和五年四月十一日発行
編集発行　公益財団法人崋山会
理事長　鈴木　愿
常務理事　林　勇夫
事務局長　大根義久
〒四四一―三四二一
愛知県田原市田原町巴江一二の一
TEL〇五三一・二二・一七〇〇
FAX〇五三一・二二・一七〇一

編集協力
田原市博物館
崋山・史学研究会
会長　小林一弘

※崋山会報ご希望の方は崋山会館・田原市博物館にお申し出ください。
次回発行予定　令和五年十一月十一日